

聖書：ヨハネの黙示録 7：1～17

説教題：子羊が彼らを牧し

日時：2021年2月28日（朝拝）

前の6章では7つの封印で封じられた神の巻物の内、6つ目の封印までが解かれました。6つ目の封印が解かれてヨハネが見たのは、世界の歴史の最後の日の光景でした。そして第7の封印は8章1節で解かれます。その間に挿入されている7章は何を語っているところでしょうか。6章17節には、この世界の終わりの事態に接した人々の狼狽と恐怖の言葉が記されていました。「神と子羊の御怒りの、大いなる日が来たからだ。だれがそれに耐えられよう。」この問いに答えるのが7章です。果たして耐えられる人は一人もいないのか。このさばきが臨む中、信仰者たちはどうなるのか。その問いを受けて、この7章には一言で言えば神の民に与えられる守りと祝福が記されています。

7章1節は「その後、私は四人の御使いを見た」と始まります。ここを読む上で私たちが注意すべきは、ここは第6の封印が解かれた後に起こることを述べているのではないということです。ヨハネの黙示録は時間的順序に従って書かれているものではありません。黙示録の後ろの方に書かれていることは、前の方で書かれていることより時間的に後に来るということは意味しません。1節に「その後、私は見た」と記されていますように、これはヨハネが幻を見た順序を意味します。彼は第6の封印が解かれた場面についての幻を見た後、この7章の幻を見ました。ではこの7章1節で見た幻は、いつ起こる出来事なのでしょう。前回の6章12～14節では、この世界が決定的に崩壊し始める様子が記されました。ところが7章3節を見ると、まだ地にも海にも木にも害が加えられていません。ですからこれは第6の封印が解かれる以前であると分かります。さらに多くの注解者が言うのはゼカリヤ書6章との関係です。黙示録6章1～8節で見た最初の4つの封印の話では、4つの馬とその騎手による災いのことが述べられました。実は旧約聖書ゼカリヤ書6章に、そのもととなる4つの馬の話が出て来ます。そしてゼカリヤ書6章5節では、それらを指して「四方の風」と言われています。だとすると今日開いている黙示録7章1節の「地の四方の風」とは、6章1～8節で見た4つの災いを指していると考えられます。とすると7章1節はいつのことになるでしょう。それは6章1～8節の最初の4つの封印が解かれる以前ということになります。最初のさばきが地に臨み始

める前です。

7章1節で四人の御使いは四方の風をしっかりと押さえて、それが地に吹き付けないようにしていました。2～3節から分かりますように、いつか神のタイミングに従って、その災いは地に臨むようにしなければなりません。その責任を4人の御使いは負っています。しかしそこへもう一人の御使いが来て、まだそれを実行してはならないと言います。3節にある通り、「私たちが神のしもべたちの額に印を押してしまふまでは」と。この神のしもべたちとは、このあと述べられる144,000人のことです。その額に押す「印」とは何でしょうか。14章1節にそのことがはっきり書かれています。「また私は見た。すると見よ、子羊がシオンの山の上に立っていた。また、子羊とともに十四万四千人の人たちがいて、その額には子羊の名と、子羊の父の名が記されていた。」 ですからこの印とは「子羊の名と、子羊の父の名」、すなわちキリストと神の名ということになります。これは彼らがキリストおよび神のものであること、その所有であること、その民であることを示します。またそれによって彼らを守り、保護するものです。この印が押されるまでは四方の風が吹き付けないようにせよ！つまり6章1～8節で見たさばきが地に臨み始める前に、神はご自身の民を区別し、彼らに害が及ぶことがないようにされたということがここに言われているわけです。

なお黙示録で言われている神の守りはクリスチャンが苦しみにあわないとか死なないということではありません。同じ地上に住む者として信者も周りの人々と同じ環境の中にあります。またかえって苦しみや、さらには殉教さえあると言われています。ですから約束されているのは肉体的な守りではありません。そうではなく真の意味で滅びに至ることがないようにという守りです。永遠のいのちを失わないように、信仰を投げ捨てず最後まで堅忍するように、むしろ困難を用いてきよめてくださる神の導きのもとで神が用意された最後の救いに確実に到達するようにという守りです。

ヨハネはその後、印を押された者たちの数を耳にしました。それは144,000人だったと4節にあります。黙示録において数字は象徴的に用いられています。さてこれは誰のことなのでしょう。5節以下にイスラエルの部族名のもと、人数が記されていますから、イスラエル人、ユダヤ人のことなのでしょう。彼らが民族的に特

別に守られるということの意味しているのでしょうか。そうでないことは先ほど参照した14章から分かります。先ほど14章1節を参照しましたが、14章3節を見ると、144,000人について「地上から贖われた」人々だと言われています。ですからこれはユダヤ人と異邦人の両方を含む神の民全体のことと分かります。では144,000という数字にはどんな意味があるのでしょうか。これは $12 \times 12 \times 1000$ という数字です。12が2回かけられているのは12部族の12を強調するためかもしれません。あるいはイスラエルの12部族と12使徒を掛け合わせて、旧約と新約の神の民全体という意味があるのかもしれません(21章12~14節)。それらに多数を意味する1000がかけられています。どちらにせよ、ここにあるメッセージは神はご自身の民をこのように数えておられるということ。神は一人一人を良く知っておられる。十把一絡げで正確な人数は良く知らないというのではない。一人一人が主の心に留められ、覚えられ、また配慮されている。このような神の守りと配慮が6章1~8節で見た災いに先立って神の民に与えられているということをここは述べているわけです。

さて9節以降、「その後、私は見た」と記され、ヨハネが次に見た幻が記されています。そこに「すべての国民、部族、民族、言語から、だれも数えきれないほどの大勢の群衆が御座の前と子羊の前に立ち、白い衣を身にまとい、手になつめ椰子の枝を持っていた」とあります。ここに出て来るのは誰なのでしょう。結論から先に言えば先に見た額に印を押された人々と同じです。この7章前半の幻と7章後半の幻の関係は5章5~6節で見たことと似ています。ヨハネは封印を解くことのできる人がいなくて泣いていましたが、その彼に長老の一人が「ユダ族から出た獅子、ダビデの根が勝利したので、封印を解くことができます」と告げました。そう言われて彼が目を上げて見たら、そこに見えたのは屠られた姿で立つ子羊でした。耳ではライオンだと聞きましたが、彼が実際に見たのは子羊でした。今日の箇所でもヨハネは神に印を押されたのは144,000人だと聞きました。彼が数えたわけではありません。そして9節に彼が実際に見た光景が記されています。それはだれも数え切れないほどの大勢の群衆でした。ある人は両者に違いがあると言います。片方は144,000人とはっきり数字が言われているのに、もう片方では数え切れないとされている。これは一致しないのではないかと。しかしこれは大事なことを私たちに教えています。神からの言葉によれば、それは144,000人でした。先に述べたように、これは象徴的な数字ですが、神の民が一人一人神に数えられていることを示

しています。しかしヨハネが見るとそれは無数の人々に見えた。これは神の視点と人間の視点の違いと言えます。また神からの言葉によれば、それは神の民イスラエルという観点から 12 部族の枠組みで語られましたが、ヨハネの目が実際に見たところによれば、それは多くの国民、部族、民族、言語からなる人々でした。大切なことはこの両者は同じ人々を指しているということです。

そしてヨハネは、この群衆が「御座の前と子羊の前に立って」いる様子を見ました。ですからこれは天における光景だと分かります。彼らが最後に天に達した時の姿です。この章前半の 1～8 節では、四つの災いに先立って神がご自身の民一人一人にもれなく印を付けた場面をヨハネは見させられました。そして今度彼が見させられたのは、その彼らが神の守りによって最後の状態に達した時の姿です。注目すべきは彼らが「御座の前と子羊の前に立っていた」とあることです。6 章 17 節では、御座と子羊の前で「だれが耐えられよう」と言われていました。原文を直訳すれば、それは「だれが立ち得ようか」という表現でした。だれも立つことができない！という叫びでした。ところがここに「立っている」人たちがいます！これが 6 章 17 節への答えです。神の民はさばきの日が来ても御座と子羊の前に立っています！その彼らは白い衣を身にまとい、手になつめ椰子の枝を持っていました。第 3 版までは「しゅろの枝」と訳されていました。彼らは勝利を祝って、10 節にある通り、大声で賛美していました。「救いは、御座に着いておられる私たちの神と、子羊にある。」自分たちがこうして守られ、救いに達したことで神とキリストを心から賛美しています。また 11～12 節には天使的存在も一緒にひれ伏し、神を礼拝している様子が描かれています。

さてこの幻を見ていたヨハネに 13 節で長老の一人が問いました。「この白い衣を身にまとった人たちはだれですか。どこから来たのですか」と。ヨハネがそれが分からず、相手への尊称の言葉をもって「私の主よ、あなたこそご存じです」と述べます。するとその長老は言いました。14 節後半：「この人たちは大きな患難を経てきた者たちで、その衣を洗い、子羊の血で白くしたのです。」ある人たちはここで言う「大きな患難」を、主の再臨の日直前の特別な大患難と取りますが、そうではありません。世の終わり直前のいよいよ混迷を深める患難も含みますが、これは全時代のクリスチャンが経験する様々な苦しみや患難を指します。ヨハネがここで見た人々は、それらの患難を抜け出た人たちです。神の守りによって、そこを通り抜け

た人たちです。その彼らについて「衣を洗い、子羊の血で白くした」と言われています。最初に読むと「血で白くした」とはどういうことかと思うかもしれませんが、皆さんはすぐお分かりでしょう。これはキリストの十字架の血による聖めのことです。ここで彼らの子羊の血で「白くした」と記されています。もちろん人間にその力があるわけではなく、ただキリストの血によってそうすることができるのですが、ここに私たちの信仰が位置付けられています。この祝福はただキリストの血によりますが、私たちがそれを信じ、自分のものとして受け取ることが大切だということです。それによって自らの衣を洗い、白くしたということが起こる。またこの「洗う」と「白くした」という言葉は両方とも過去形で記されています。これはある過去の時点における一度限りの決定的な洗いまた聖めを意味します。だんだんと洗い、だんだんと白くしたのではありません。つまり彼らはキリストへの信仰を持った時、決定的に自らを洗い、白くしたのです。もちろんその後も私たちは罪を犯し、そのたびごとに神に告白し、赦しと聖めを願う必要はありますが、主を救い主として信じた時にこの祝福は決定的にその人のものとなるのです。そうしてその衣を洗い、白くした者たちのみが患難をくぐり抜け、天の幸いへたどり着きます。

最後 15～17 節には、その者に与えられる究極的な幸いが述べられています。まず 15 節に「彼らは神の御座の前であって、昼も夜もその神殿で神に仕えている。御座に着いておられる方も、彼らの上に幕屋を張られる。」とあります。彼らは神のみそばで永遠に神との親しい交わりの中を歩みます。神が幕屋を張られるとは、旧約の幕屋がそのことを意味したように、神の臨在の祝福を現します。まさに神がともにいてくださるのです。後に見る 21 章 3 節の言葉、「見よ、神の幕屋が人々とともにある。神は人々とともに住み、人々は神の民となる。神ご自身が彼らの神として、ともにおられる。」という御言葉が思い起こされます。また 22 章 3～4 節の「神と子羊の御座が都の中にあり、神のしもべたちは神に仕え、御顔を仰ぎ見る。また、彼らの額には神の御名が記されている。」も同じことです。

この神の守りによって 16 節に「彼らは、もはや飢えることも渴くこともなく、太陽もどんな炎熱も、彼らを襲うことはない」と言われています。今日の食べ物がある私たちには分かりづらいことかもしれませんが、古代世界の土地は常にこの脅威の下にありました。いつ飢えるか、いつ飲み水が手に入らない時が訪れるか、それは脅威でした。しかしそういう災いが一切ない！太陽や炎熱が照り付けること

もない。地上の歩みにはあらゆる困難、苦しみ、災いが彼らには伴いました。しかし天国ではそのような不快なこと、危険なことは一切ないのです！

そして17節には「御座の中央におられる子羊が彼らを牧し、いのちの水の泉に導かれる。」とあります。子羊が牧するという文字を文字でだけ考えると不思議ですが、これも私たちには良く分かることでしょう。私たちのために子羊となって屠られたキリストが私たちの羊飼いとなって養ってくださる。いのちの水の泉へ導いて下さる。あの詩篇23篇を思い起こさずにいられません。詩篇23篇1～3節：「主は私の羊飼い。私は乏しいことはありません。主は私を緑の牧場に伏させ、いこいのみぎわに伴われます。主は私のたましいを生き返らせ、御名のゆえに私を義の道に導かれます。」そして最後に「また、神は彼らの目から涙をことごとくぬぐい取ってくださる」とあります。これも後に見る黙示録21章4節を先取りして述べているものです。21章4節：「神は彼らの目から涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、悲しみも、叫び声も、苦しみもない。以前のものが過ぎ去ったからである。」この世の私たちの歩みにはいつも悲しみがあり、叫びがあり、苦しみが伴います。しかしやがての日には神が私たちの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。私たちの地上のすべての戦いと労苦は報われます。もう悲しみの涙を流すことはありません。

以上、主はこの時点でヨハネに、そして私たちに神の民の幸いを示してくださいました。私たちも地上の歩みにおいてなお戦いがあり、苦しいことがあり、また様々な誘惑があります。しかし心に留めるべきは神はご自身のしもべたちに印をつけてくださり、それによって守ってくださるということ。究極的な害が及ぶことがないように！と。ですから私たちはどんな中でも勇気を失わず、この御言葉の光の下で考え、心を強くして、神に信頼し、キリストに信頼したいと思います。そしてその者はキリストによって必ず患難を抜け出し、やがての日に白い衣を着て、神とキリストを心から賛美する日が来ます。神が幕屋を張って私たちを守り、子羊が私たちを牧してくださいます。そしてその方において神は私たちの目から涙をことごとく拭い取ってくださる。この約束を信じ、見上げて、主に忠実に歩む戦いへと強められたいと思います。そして永遠に牧者である子羊に養われ、いつもいのちの水の泉へと導かれる幸いに歩む者とさせていただきたく思います。